

木版画（黒色一版刷り）授業の流れ**① 目標**

- * 日本の伝統的版画である木版画の実技を学ぶ。
- * 表現技術上の目標は、**彫刻刀の種類を様々に組み合わせ、複雑な表現**をめざす。丸刀、平刀、三角刀（単純は不可）、さらにサンドペーパーの効果、太いクギによる白い点の表現などどこまで細かな表現が出来るか、挑戦してみる。
- * 自分と社会や時代とのかかわりについて考察してみる。
- * 時間が確保できれば、主版法の多色版画としてさらに発展させる。（とりあえず主版が刷れたら手彩色で色をつけてみる。）

② 作品のタイトル 「ある日の新聞と私」（20??年の新聞と私）

- * 「自分」と「社会や時代」とのかかわりを、新聞と自分の顔を組み合わせることで考え、表現してみる。どのような記事を選んだとしても、それは今生きている自分と同じ時代に起きている、あるいは存在しているものである。それが重大な事件でなく、ただの商業的写真であっても同様である。自分を取り巻く社会現象や事件、自然などを、今の自分の顔と組み合わせることで、漠然とした自画像ではなくテーマ性を持った作品に仕上げたい。（テーマ性を意識しすぎるとかえって動きが悪くなることもある。何でも組み合わせれば、結果としてテーマ性のある作品になると考え、楽な気持ちでやることも大切。）

③ コラージュによる下絵作り（顔写真の拡大コピーと新聞を使って）

- ・「私」の顔と新聞紙のなかの写真や記事を組み合わせ、コラージュする。コラージュとは材料を切り貼りすること。（はり絵）
 - 1 新聞紙の中から気になる写真や文字を切り抜く。
 - 2 版木を画用紙の上に置き、周りを鉛筆でなぞって画面サイズを確定。
 - 3 画面サイズの上に材料を置いて構成を考える。
 - 4 決定したらのりづけする。

注

- ・「私」の顔はあらかじめコピーしたものを使用する。（顔写真を文字仕様で白黒コピー）「私」の顔が主役である。どう配置するか、よく考えて。
- ・新聞紙は「ある日」＝最近の一日分の新聞とする。材料が多すぎるとかえってまとまらなくなる。また、限定された不自由な中からのほうが、意外にすばらしいものが生まれることが多い。文字も必ず入れること。文字の大きさは彫れる範囲で考える。文字数は1文字以上とする。画面構成上、適当と思われる範囲で決める。（たとえば毎年年末にこの一年を漢字で表現すれば何？のような効果も考えてみる。）
- ・基本は切り抜きをそのサイズで使う。どうしても大きさを変えて使いたい場合は相談する。すぐに貼らないで、様々に置いて構成を考える。材料をバラバラに置くだけでなく、重ねることも大切。どれもが同じように主張しあうとまとまらない。強弱（形や面積な

ど) 組み合わせさせてバランスが生まれる。

④出来上がった下絵〈コラージュ〉をトレースする。

作業1

下絵（コラージュ）にトレーシングペーパーを重ね、テープで一辺を固定する。

白・黒の境界をトレースする。形を確定するについて大切な線を写す。新聞の記事や写真は細かいので、省略しながら写してよい。あまり省略、単純化が過ぎるとつまらなくなる。迷う場合は省略を後にして、ある程度までは写すほうが良い。白・黒の2種類に限らず、その中間トーン（灰色）にも配慮する。⇒たとえば白い点や細い線の集合で灰色部を表現することが出来る。

トレースはていねいな線でおこない、面を黒く塗ったりはしないこと。画面サイズもトレースすること。黒ボールペンかシャープペンシルがよい。

作業2

トレースが終わったらそれを2枚程度コピーする。（1枚は予備）

コピーした紙に鉛筆やサインペンなどで黒ベタ・ハーフトーン・白い点の集合・白など、どのような仕上がりにするか検討しながら着色する。下絵のコラージュと白黒が逆になってもかまわない。この作業で、どのように なにで彫るか あるいは彫り残すか のイメージをほぼ確定する。

白い線・黒い線・白い面・黒い面・(点・サンドペーパーによるぼかし)の画面上でのバランスが大切

●版木の表面を、オレンジ色にたっぷりの水でうすめて着色しておく。彫るときに、彫ったところと残ったところが見やすくなり、作業性がよい。

⑤「下絵」を版木に転写する。

1. 版木の表面（オレンジ色）にトレーシングペーパーを裏返して重ね、ソフトテープで固定する。（1辺の2箇所につけ、めくって下絵が見られるようにしておく。）
2. 版木とトレースペーパーの間にカーボン紙（黒い面を版木側にする）をはさむ。
3. さらに、カーボン紙とトレースペーパーの間に、白い紙をはさむと線がよく見える。赤ボールペンでなぞり、トレース完了。（赤ペンを使ったのは、トレースの作業でのミスを防ぐ工夫。ほかの色で分けてもかまわない。）
4. カーボン紙は返却すること。トレースペーパーと黒い紙の下絵はスケッチブックにはさんで、保管すること。彫る時にも使います。

⑥ 版木への転写が終わったら

* ここでさらに作業しやすいように、コピーに黒色付けしたものを参考にしながら、版木上に彫り残す部分のみ再度着色する。絵の具は水でたっぷりうすめて使う。オレンジ色と区別がつけばよい。（青、茶など）またカーボンの線が見づらくならぬ程度に。ここでの着色は、「彫り残すしるしの役目」があればよいので多少のはみ出しや塗りむらは気にしない。

「彫り」の作業性がよくなる。

* 版木に色をつけるのは、カーボン紙の線が入った後からでもよい。

⑥ 彫り

- ・新聞紙を広げ、周囲を3～4cm折り曲げ堤防にして、版木を彫る作業台紙とする。
- ・版木刀の使い方——手前にひく
- ・その他の彫刻刀の使い方——先に押し出す
- ・彫りの効果を考えて、同じ刀ばかりを使わないこと。（別プリント参照）
- ・太い釘による点（白い点）の表現
- ・紙やすり（サンドペーパー）によるぼかし 平刀によるぼかし
- ・彫り残した凸部は、すそ広がり台形状にすること。
- ・どの程度までの深さに彫るか
- ・ケツ落ちについて その防止方法とその生かし方（彫りのタッチ、方向など）
- ・彫刻刀の研ぎ方 刃物砥ぎ機の使い方
- ・彫り方による表現の違いの例 A. B.

A. は版木刀で四角に深く切り込み
を入れ、それにぶつけるように彫
った。B. は四角に線を彫ってから。

A. と B. の違いに注意

⑦ 刷り（摺り）＝すり

- ・各机に ローラー2本、 インクの練り板（引き出しごと）2枚、
ぶんちん2～3本、 バレン 人数分
- ・インクの出し方——練り板のはじめに適量を（出し過ぎないこと）
- ・ローラーと練り板は、作業後、ラップをかけておく。水性のインクなので乾燥させると良くない。
- ・版の上においた和紙を手で押さえないこと。（手、指がバレンと同じ役目をしてその後が濃い黒で刷られてしまう。インクは粘りがあるので、押さえなくてもずれない。）
- ・バレンの油切れに注意する（油がなくなり、摩擦が強くなると紙がずれたり、紙を傷めたりする原因となる。また多すぎれば、紙に染み込んでシミになる。バレンに油をひき、布で軽く拭き取った程度で使う。目安は1枚刷るたびに1回油を引く。）
- ・余白部分を汚さない。（手の汚れは常に気をつける。）
- ・インクのつけすぎ、つけむらに注意。よくローラーにインクをからませること。少ない場合は足せばよいが、べっつりのせてしまうと、版の凹部にインクが入ってしまい、正しい刷りが出来なくなる。
- ・ケツ落ちの効果も見てみる。白を求める場合は必要によりあて紙を作る。